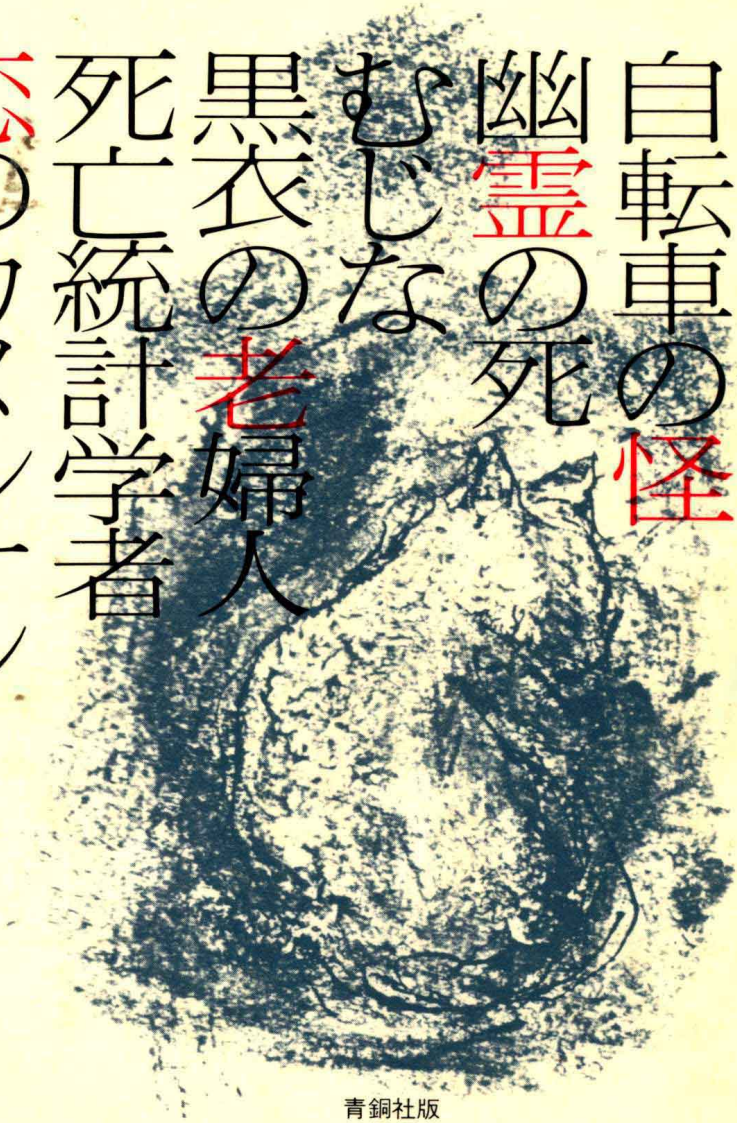
ふらんす怪談

H. トロワイヤ
澁澤龍彦
訳

殺人妄想
自転車の怪
幽霊の死
むじな
黒衣の老婦人
死亡統計学者
恋のカメレオン



青銅社版

ふらんす怪談

昭和五十七年七月十五日　第一刷発行

定価　一二五〇円

著者　H・トロワイヤ

訳者　澁澤龍彦

発行者　葛西良員

発行所　株式会社　青銅社

〒一一二東京都文京区小石川五丁目三八―九
電話(八一一五)九七八六振替東京一―七六七九

印刷　大明印刷
製本　大口製本

万一乱丁落丁がありましたらお取替え致します

© T. Shibusawa 1982

Printed in Japan

ふらんす怪談

H・トロワイヤ

澁澤龍彦 訳

青銅社版

ふらんす怪談

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

殺人妄想 † 7
自転車の怪 † 27
幽霊の死 † 43
むじな † 61
黒衣の老婦人 † 87
死亡統計学者 † 115
恋のカメレオン † 133
訳者あとがき † 171

殺人妄想

男は顔を上げて、わたしをしつこく見つめていた。その顔はわたしにとって知らぬ顔ではなかったが、そうかといって、どこで見知った顔であるか思い出すことはできなかった。痩せていて、肌の色は灰色であり、乾いた土のように罅割れている。大きな眼が血走っていて、顎と頬の髯が酒で汚れている。大きすぎるカラーが、羽をむしられた牝鶏のような首のまわりでぶかぶかしている。唇には、火の消えた煙草の吸殻がぶらさがっている。

「誰だい、あのひとは?」とわたしは酒場のボーイに訊いてみた。

「さあ、存じませんが。三週間ばかり前から、毎日のようにやって来なさるお客さんです。きまって同じ席に腰掛けましてね、きまって同じ上等のペルノを召しあがります。それからきちんと勘定をして、帰られますが、お店の常連の誰とも一言もお喋りになりませんね」

それからボーイは布巾でテーブルを手早くさっと拭くと、いかにも大袈裟な打明け話の調子で、

「あのひとは多分、何かよからぬ仕事をしているひとですぜ、なあに、あっしにはちゃん

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

と分りまさあ！」
乗合自動車の運転手が二人、その時酒場に入って来たので、ボーイはわたしのそばを離れて新来の客の註文を聞きに行った。
この場末の酒場には、大して客はいなかった。赤い綿ビロードの腰掛、古くなってよく映らない鏡、鋸屑が一面に散らかった床、すべてがうらぶれていた。洗い皿と気の抜けたリキュールの臭いが、室内にただよい、窓には夜が、真黒な、敵意を含んだ汗をかいていた。隣りの部屋からは、玉を撞いている人たちの点数を数える声がにぎやかに聞えていた。
大理石の円卓の前に坐った男は、なおもその視線をわたしから離さなかった。急に、すっくりと立ちあがると、わたしの方へ二三歩近づいて来た。背の低い男で、着ている背広は油じみて擦り切れ、まるで店ざらしの古着のようにだらりとしていた。その上、彼はややびっこを引いていた。わたしの前に来ると、立ちどまって、悲しそうな様子で頭を振った。それから、このみすぼらしい酔っぱらいは重々しい声を発したのであるが、その言葉の調子を聞いた途端わたしの心にはっと過去の記憶がよみがえった。
「わたしをお忘れですか。ラモーですよ！　第二砲兵中隊のラモーですよ……」
わたしは唖然として、
「どうもこれは、お見それしました」と口ごもった。
すると彼は、溺れた人のように両手を上げて、わたしの言葉を遮り、
「いいんです、いいんです……何しろわたしはすっかり変っちまいましたからね、お気が

つかれないのが当然です」と言った。それから、「変ったといえば、あなたも変りましたなあ。しかし、あれから十年とは経っていないのですよ。あの頃、わたしたちはラジオの真空管の取扱いを雑にしては、いつも二人で怒鳴られていましたっけ。《おれが一週間がかりで教えても、お前たちは器械を滅茶滅茶にすることしか覚えんのか、ぼんくらどもめ！》てな調子でね。はっは」

男は軽い咳でもするような、貧相な笑い声を立てた。わたしはこの男の裡に、軍隊当時の、あの陽気で元気な若者の面影を見つけ出すことがほとんど出来なかった。軍隊当時の彼といえば、《週番伍長の不当な特権に抗議する》ために、夜、一日の疲れにぐったりした同室の汗くさい兵士たちを煽動する一場の演説をぶっていたものである。茶色の毛布のめくれた寝台の上に立ちはだかった彼は、戦闘帽をかぶり、ローマの護民官さながらの身ぶりで、雑役の労働は古参兵も新兵も平等に分かち持つべきである、と主張していた。《しかり、諸君、なぜにわれわれは一年中便所掃除の憂目に遭わねばならないか……》仲間たちは一致して彼を《機械にねじが一本足りないような男》と評していたが、どうして、彼はなかなか博学であった。

男はごつごつした熱っぽい掌で、わたしの手を握ると、

「ああ、お逢いできて嬉しいですな、実に嬉しいです！　何しろ久しぶりですからな！去る者日々に疎しだなんて、いただけませんよ、あなた……ボーイさん、ペルノを一杯お

くれ！　そう、二人分だ！　いやいや、かまいません、わたしがおごりますよ！」

男はわたしの隣りに坐った。わたしは彼が以前に志望していた法律の勉強を、その後続けることができたかどうか、訊いてみた。だが彼にはわたしの言葉が聞えないようだった。頭を垂れ、どんよりした眼をして、彼はペルノをぐいぐい飲むかと思うと、鼻をすすったり、小さな声でぼそぼそと何かつぶやいたりするのである。それから、急に、陰鬱な声で、こう話しはじめた——

「ねえ戦友、あんたは、わたしを軽蔑なさるかね？　なるほど、わたしは、いつも立派な肘掛椅子にでんと坐って、お尻を煖めているといった人間の風体はしていないかもしれません、家へ帰れば女房子供が待っているといった、幸福な人間の風体はしていないかもしれません、律儀な、几帳面な、真面目な人間の風体はしていないかもしれませんよ。しかしですね、まあわたしのことをよく見てください、この無精髭だらけのむさくるしい顔と、靴拭マットのように臭い背広をよく見てください。そうしてそれがあなたを不愉快にするならすると、はっきりおっしゃってくださいよ！……ときに、煙草をお持ちですか？」

男は鼻の孔をひらき、眼を閉じて、貪るように二口三口、すぱすぱと煙を吸いこんだ。

「ところで、見かけによらず、わたしは結婚してるんです」と男が言葉を続けた、「わたしも世間の夫婦者の御多聞に洩れず、夏の休暇の計画だとか、家の中の飾りつけだとか、別荘を買うとか、子供をつくるとか、いろんなことを考えたものですよ。ささやかな公定値段の幸福というわけですな。善良なる市民の《おかずをいっぱい添えた弁当》みたいなも

んです。……あなたは飲めないんですか？　駄目ですね。わたしときたら、もう飲むこと以外に何もありませんな。朦朧とした水の中にいつも潜ってますよ。潜りっぱなしに潜っていられたら、こんな仕合せはないんですがね！」

「あなたの奥さんは……」

「いやいや、死んではおりません。どこかに生きています。しかし、彼女を怨む気はありませんね。わたしは誰をも怨みません！　こういう気持になるまでには、でも三週間はかかりましたよ。こういう気持でいる方が、だいたい気楽なんです！　それに、議論してみたってはじまりません、女房はあの男を愛していたんですから。彼女にだって、たしかに好きな方の男を選ぶ権利はあるはずですよ。しかしとにかく、女というのは悲劇を好むものですな。よしんば五十回、名誉を傷つけずに亭主を裏切る機会を与えられたとしても、女というものは、すべてを破滅にしてしまうかもしれぬ五十一回目の機会を自分で求めるものです。彼女たちがそうするのは、面白ずくでもなければ欲望でもなく、いわば一つの必要とでもいうものでしょうか。むずがゆさのような、居ても立ってもいられぬ気持なんですね。驚いたやつらですよ！　それでもしかし、わたしの女房は可愛くもあり、おとなしくもありました。小さな猫のような顔に、鏡の稜角のような明るい素速い眼をしていました。すねた赤ん坊のような唇をしていました。綺麗好きで、香水をぷんぷん臭わせていて、陽気な女でした。それがあんなことをしでかしたんです！　平凡な話ですよ！　相手はわたしたち夫婦の友達でした。わたしのいちばん仲のよい友達でした。ガストン・モレ

ルと言いましてね、茶飲話を語るのがうまい、痩せた背の高い男でした。この男の話を聞いて、女房はいつも笑っていたものです。彼女の笑い方たるや独特な風がありましてね、まるで相手に締め殺してくれ、噛みついてくれとでも言わんばかりに、顎をのけぞらせ咽喉をふくらませるんですな。ガストン・モレルは服装などに凝る男で、ヘリオトロープの香水を常用していましたっけ！」

ラモーはここでいかにも不快そうな渋面をつくり、煙草の吸殻を床に投げ棄てた。

「何も微に入り細を穿ってお話しようとは思いません。自慢のできる話じゃありませんからな。それに、多分こんな話は、あなたにはやり切れないでしょう。あなたには《申し分ない紳士》としての、あなた自身の悩みがあり、あなた自身の希望があり、あなた自身の悦びがあるに違いないのだから。でもわたしは、あえてこの瑣末事にあなたの注意を向けようとするんです……ふうん！　上等なお召物ですな……わたしも昔、同じ生地のやつを持ってましたっけ。もっとも縞目が少しばかり荒かったかな。うちに置いてありますよ。みんなうちに置いてあるんです。新聞にやつらは《嫉妬の悲劇》と書き立てました。とんでもない、事実は悲劇ですらなかったんですがね。……

ごく早いうちから、わたしは感づいていました。そこで、私立探偵社を使って、二人の恋人同士を尾行させたのです。そして、ついに二人が一緒に寝ていることを知りました。私立探偵社の費用が三千フラン。でもそれだけ金を使った甲斐はありました」

「それで？」

ラモーは静かな眼ざしでわたしを見つめた。その眼は盲人の眼のように、どんよりと溶けたように曇っていた。罅割れた二つの唇は、その間からやっと言葉を押し出しているといった感じであった。

「それで、わたしは二人を殺らしてやろうと決心したんです」と単調な声で言った。「まず男を先にやってやろう、とね。彼はミシェル・ビゾ街の厚紙製造会社で働いていました。いつも仕事がひけると、サール街から地下鉄に乗るんです。サール街というのは、地下鉄道に沿ってのぼり坂になっている暗い地下道です。わたしはこのサール街とシビュエ街の角のところで、やつを待ちぶせていました。六時でした。あたりは殆んど暗くなり、街燈が点っていました。外套のポケットの中で、わたしはぱちんこを握りしめておりました。浅ましい次第です!」

男は眼の前のコップの上で両の手をぱちんと叩き合わせ、それから膝の上にだらりとその手を投げ出した。みじめな薄笑いが口から洩れた。

「そうです、そうです、わたしはすべてを昨日のことのようによく覚えております。あれはシビュエ街でした。ガス燈のまわりには霧が青い林檎のようにぼうと霞んでいました。石畳のじめじめした臭いがただよっておりました。真向いの壁には、黄色い大きな広告ビラが貼ってありましたが、引裂かれた部分が舌のように地面にまで垂れ下っておりました。人っ子ひとり見えません。田舎のように静かです。と、急に、地下鉄の轟音が、ごとんごとんと通り過ぎました。ズボンの裏地を通して、わたしは腿にピストルの冷たさを感じて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com